

SO 言語および OS 言語における移動を含む文の処理メカニズム

矢野 雅貴
東京都立大学

概要

多くの言語において、主語 (S) が目的語 (O) に先行する語順 (SOV, SVO) が、目的語が主語に先行する語順 (OSV, OVS) に比べて理解しやすいことが知られている。この原因に関して大別すると 2 つの仮説が提案されてきた。ひとつは、O 先行語順のほうが S 先行語順よりも (調査対象であった各言語において) 統語構造が複雑であり、それを表象するために、より多くの認知的リソースを必要とするという仮説である (統語仮説)。もうひとつは、意味役割に着目し、動作主先行型のほうが被動作主先行型より理解しやすいと説明する仮説である (意味役割仮説)。

これらの仮説の妥当性を検討するために、VOS を基本語順とし、SVO 語順を派生させることが出来るカクチケル語及びセデック語を対象とした脳波実験を行った。実験の結果、統語的に複雑な SVO のほうが、統語的に単純な VOS よりも負荷が大きいことが明らかとなり、統語仮説が支持された。動作主先行型 (SVO) のほうが被動作主先行型 (VOS) より理解しにくいと、意味役割仮説は支持されなかった (Yano et al. 2017; 2019)。

この研究も含め先行研究で十分に考慮されていない要因として談話的影響がある。移動を含む文は談話的に有標であるため、移動を動機づけるような適切な文脈が呈示されていないことが負荷の原因であるという第 3 の可能性が考えられる (談話仮説)。これを検討するために日本語を対象として、語順 (SOV/OSV) と文脈の種類 (適切: 目的語が旧情報/不適切: 目的語が新情報) を操作した脳波実験を行った。その結果、不適切な文脈で用いられた OSV (北村さんを吉田さんが叱った) は SOV に比べて負荷が増大したが、適切な文脈で用いられた OSV ではそのような傾向は観察されなかった (Yano & Koizumi 2018)。この結果は談話仮説を支持する。ただし、文脈操作の影響は実は談話処理に対してではなく、「O が表層位置で解釈され、filler-gap 依存関係の構築を行わずに済む」といった統語解析にあったという解釈も残されている。これを排除するために、さらに容認度調査と脳波実験を行った。移動 (filler-gap 依存) の有無を調べる手がかりとして島の制約を用いた調査では、O が旧情報であっても新情報と同程度に違反が観察されたことから filler-gap 依存の有無に関して文脈操作による影響があるとは言えないことが明らかとなった (Yano 2019)。また、「北村さんにしか青木さんが挨拶しなかった」というように O に「シカ」を付け、元位置 (または vP 内) に義務的に再構築されるように実験文を変更した上で脳波計測を行ったところ、適切な文脈があると OSV の負荷が減衰するという結果が得られた。この結果から文脈操作によって文解析装置が構築する統語構造が異なるという説明が出来ないことを示した (Yano & Koizumi 2021)。